宇土駅

三角線の起点「宇土駅」は、今様の駅舎に生まれ変わった。しかし、その界隈をゆるりと歩けば昔ながらの下町風情に包まれる

宇土駅は、1895（明治28）年、現在の鹿児島本線の川尻ー松橋間の開通に伴って開業。その4年後の1899（明治32年）、三角線が開通。宇土駅は、三角線の起点かつ鹿児島本線と三角線の分岐点となった。

駅構内には、三角線の起点の証「0キロポスト」が、誇らしげに立っている。ここから終点の三角駅まで、25・6kmの三角線が始まるのだ。

宇土駅は、九州新幹線全線開業に向けてリニューアルを遂げている最中。新しい駅の一部が、2009（平成21）年11月1日にオープンしている。

三角線の〝新しい顔〟として生まれ変わる駅だけれど、ホームは昔からのものがそのまま使われる。新しい宇土を象徴するような、近未来的でシャープなつくりの新しい駅のなかで、レンガ造りの基礎をもつホームが、古い歴史を静かに伝え続ける。

赤煉瓦のホームは開業当時の名残。三角線の起点の証し「0 キロポスト」には手描きの文字

宇土駅　うとえき
宇土市三拾町
電話 0964・22・0019

我がまちの駅自慢！

「地域の核になる人が集まる楽しい駅に」

宇土駅 駅長・岩崎昇一さん

宇土駅に駅長として赴任したのは2008（平成20）年なんですけれど、宇土駅には26年前にも配属されているんです。時代が変わっても、三角線はちっとも変わらないなぁと思います。私もプライベートでよく乗るんですけど、車窓を眺めていると、昔ながらの風景がそのまま残っていて、短い距離でも旅する醍醐味を十分味わえます。

宇土駅は新しくなります。地域の核になるコミュニティスペースとして、イベントなども企画しながら〝まちおこし〟に取り組みたいですね。

宇土駅東口の新しい駅舎。バスをはじめ、周辺へのアクセスを便利にする

緩やかに孤を描く「船場橋」。周辺には武家屋敷跡などがあり、往時の町並みが偲ばれる。新しい船場橋には網田焼蒼土窯の「草木捺彩陶」が施されている

日本一古い上水道「轟泉（ごうせん）水道」もまた「馬門石」で作られた。その終点の井戸は今も鮮やかに佇んでいる

宇土はキリシタン大名・小西行長の城下町であり、かつて商業や水運で栄えた町だ。駅からぶらり足を伸ばせば、行長が船着場として開き、宇土細川藩が蔵屋敷を連ねた船場川界隈に、当時の遺構が残っている。

船場川にかかる船場橋は、1863年頃に「馬門石（まかどいし）」という薄紅色の石で造られたアーチ型石橋だ。

船場川沿いには古い石段がせり出しており、船着き場から藩米を蔵へと運び込む当時のにぎわいが見えるかのようだ。川のほとりには、武家屋敷跡や現存最古の上水道・轟泉水道の終点も。少し歩けば、毎年8月23～24日に開催される「うと地蔵まつり」発祥の地・円応寺や懐かしさ漂う商店街もある。

駅周辺のもう一つお楽しみといえば〝宇土スウィーツ〟。一口サイズの愛らしい名物菓子「うと餅」「小袖餅」や、宇土を代表する絶景スポット・御輿来海岸を表した「おこしきロール」が、旅情を誘う。

てくてく、駅あるき

町衆の気分でゆく いにしえの船場橋界隈

明治の初めに尾張の旅人が伝えたという「宇土張り子」。不知火型の土俵入りを編み出した郷土の大力士・不知火諾右衛門（なぎえもん / だくえもん）の張り子などが受け継がれている

ぐるり、マーブル生地とバタークリームの風味が絶妙なご当地ロールケーキ「おこしきロール」（1個入）220円

宇土のうまかもん

「小袖餅」 315円
「うと餅」 300円

昔むかし、お忍びで餅を食べた殿様が代金の代わりに自分の着物の片袖を娘に預けたという言い伝えが残る宇土の郷土菓子。一口サイズの愛らしい小餅には、後味の良いこしあんがたっぷり！

駅界隈、まち歩き地図

船場橋
駅から約 1km、徒歩約 15 分

宇土城跡
駅から約 2.4km、タクシーで約 5 分
小西行長が 1589 年に築城した城の跡。石垣が残るほか、小西行長の銅像がある

おこしきロール
レピドール洋菓子店
駅から約 600m、徒歩約 7 分
問／ TEL 0964-22-5652
営／ 9:00～20:00
休／第 1・3 水曜

うと餅
うと餅本舗　城南堂
駅から約 50m、徒歩約 1 分
問／ TEL 0964-22-0243
営／ 24 時間営業
休／なし

小袖餅
小袖餅本舗
駅から約 70m、徒歩約 2 分
問／ TEL 0964-22-0246
営／ 8:00 ～売り切れ次第終了
休／ 8 月 15 日、年末年始

武家屋敷跡
駅から約 1km、徒歩約 15 分
船場橋界隈は水運を通じた経済の拠点だった。当時の繁栄を今に伝える武家屋敷などの跡が残されている

円応寺
駅から約 1km、徒歩約 15 分
約 360 年前に始まった「うと地蔵まつり」発祥の地